

2008年6月22日(日)

島根県立図書館

第1回「竹島問題を学ぶ」講座

『竹島問題とは何か』レジュメ

杉原 隆(島根県竹島問題研究顧問)

- 1 于山島は竹島(独島)か
- 2 日本は竹島を実効支配したか
- 3 安龍福の発言は真実か
- 4 韓国、日本の竹島(鬱陵島)図について
- 5 竹島、松島の呼称の変化について
- 6 「竹島外一島本邦無之」
- 7 中井養三郎の「リャンコ島領土編入並びに貸下げ願」について
- 8 日露戦争と竹島の関係について
- 9 太平洋戦争、GHQ、サンフランシスコ会議と竹島
- 10 李承晩ラインをめぐる諸問題
- 11 排他的経済水域(EEZ)について

第1回「竹島問題を学ぶ」講座

『竹島問題とは何か』配付資料

鬱陵島、竹島の歴史

杉原 隆（島根県竹島問題研究顧問）

1. 鬱陵島・竹島・隠岐の位置図と元禄期の竹島の位置図

鬱陵島と竹島間の92kmについては「朝鮮王朝実録」の解釈をめぐって川上建三氏が「鬱陵島から竹島は見えない」（「竹島の歴史地理学的研究」1966年）とされたが、その後見えることが確認された。竹島と隠岐間の157kmは大西教保が「隠岐古記集」（1823年）で秋の晴れた北風の強い日隠岐の大満寺山から見えると記している。元禄期の「竹島（鬱陵島）之図」は大半が鬱陵島～竹島間を40里、竹島～隠岐間を60～80里としている。

2. 「江原道図」の鬱陵島（ウルルンド）

ソウル大学奎章閣所蔵の朝鮮古地図の一つである。蔚珍から鬱陵島までを帆船で2日かかる距離としている。近くの杆山島は一般には干山島（うざんとう）といわれ、韓国では現在の独島（竹島）と解釈されている。

3. 現在の鬱陵島の地図

現在の鬱陵島は島根県の隠岐の島町の3分の1位の面積で9000人台の人が居住している。中心の道洞（トドン）邑は、江戸時代に浜田浦と呼ばれた。鬱陵島は朝鮮国が日本の室町時代から空島（くうとう）政策をとった為、日本人が進出し現在の竹島も発見された。

4. 江戸幕府からの渡海免許状（写し）

元和3（1617）年鬱陵島へ漂着した米子の町人大屋（谷）甚吉が友人村川市兵衛正純と幕府に願い出て渡海の許可を得た。

許可された年は従来元和4年とされたが、最近寛永2（1625）年とする説が強くなっている。

5. 幕府から渡された葵（あおい）御紋入りの船印

幕府は大谷、村川家に「三つ葉葵」の船印（ふなじるし）を与えた。両家も江戸城への鬱陵島産の木材の提供、島原の乱時の幕府軍の輸送、干し鮑（あわび）の贈答等で応

えた。

6. 現在の道洞（その1）

江戸時代の70余年日本人が入港した浜田浦である。奥行きのある港で風や高波を避けるには絶好の港である。大屋甚吉も漂着以降、数度ここへ渡海し病死したので墓石が建てられたと大谷家文書にあるが確認は出来なかった。

7. 現在の道洞（その2）

港から約200m登った場所からの写真である。現在鬱陵島の中心をなす公的施設やホテル等の観光施設が集中している。近くに竹島を見る為の望遠鏡が設置されている。

8. 現在の道洞（その3）

現地で購入した鬱陵島案内の図録からの複写である。「するめ」は現在の鬱陵島の特産品の一つである。イカの干し方は日本の隠岐島の人が教えてくれたという。明治40年代鬱陵島居住の日本人では隠岐の人が一番多かったという記録がある。

9. 現在の苧洞（チョドン）（その1）

江戸時代に大坂浦と呼ばれ浜田浦に次いで数多くの記述のある港である。鬱陵島内では数少ない広い浜である。江戸時代の絵図にアシカ（みち）の多い場所と記したものがある。（図録の複写）

10. 現在の苧洞（その2）

船から見た現在の苧洞。広い漁業市場がありイカの処理におわれる人達で賑わっていた。

11. 江戸時代の竹島（鬱陵島）全図

浜田浦、大坂浦、竹浦、柳浦等の日本人が命名した江戸時代の鬱陵島の浦名が記載された絵図。現在米子市立山陰歴史館に展示されている。

12. 村川家所蔵の「竹島図」

鬱陵島だけを描いた図として注目される。港だけを重視した為か島全体の形の丸味がなく三角形に近い形をしている。昭和62年9月から12月にかけて開催された「米子の商業100年史展」に後述する「松島図」と共に出品されたがその後原図は行方不明となっている。

1 3. 大谷家所蔵の「竹島松島図」

大谷家は鳥取藩や幕府の要請で竹島松島図を提出する機会が多かったが、常にこの図を提出している。提出する時は常に写し図であることを記し原図は大絵図で自宅に所持していると記している。竹島の形は前記の村川家の図に酷似している。

1 4. 朝鮮へ漂着した大谷船乗組員名

寛文6（1666）年13端（反）の帆船2隻50名で渡航し鬱陵島で荷積用の15端船も新造し隠岐に向かって帰国途中暴雨で遭難し、朝鮮へ21人乗りの1隻だけが漂着した。それぞれ身分証明の旦那寺を記すが隠岐国の9名は浄土寺（小路に現存）、万泉寺（北方、焼失）で現在の五箇地区の人達である。

1 5. 江戸中期の隠岐国絵図（部分図）

隠岐国絵図の多くは福浦に竹島渡航海の湊であることを明記している。北方村、小路村、大満寺山等も描かれている。原図は島根大学が所蔵している。

1 6. 安龍福の証言

元禄6（1693）年鬱陵島で遭難した朝鮮人2人を大谷船が連行して隠岐福浦に帰ってきた。2人の内、安龍福は日本語が話せたので北方村や南方村の庄屋等が対話し、その内容を隠岐郡代、代官に報告している。安龍福は元禄9年仲間10人と再来日した。

1 7. 竹島渡海禁止文書

鬱陵島で朝鮮人と遭遇することが増える中で幕府は対馬藩に朝鮮国との協議を命じたが、3年経っても結論が出ずついに日本人の渡海を禁止する布令を出した。鳥取藩へもその旨の通達があり、鳥取藩は保持していた許可書を幕府に返却した。

1 8. 八右衛門の竹島図（その1）

浜田の直乗船頭八右衛門が浜田藩の財政救済の為、藩の家老岡田頼母等と計り天保4（1833）年に鬱陵島渡海を決行した。4、50本の大木を伐採しながら彼は島の図を書いた。帰藩して3ヶ月目権吉なる者が写させてもらったもので昨年発見。天保7年渡海が発覚、八右衛門は処刑された。

1 9. 八右衛門の竹島図（その2）

天保6（1835）年隠岐の海士（あま）の渡部円太夫なる者が八右衛門自身から借りて写した図である。従来八右衛門は天保4年1回だけ渡海したとされていたが、絵図に天保4、5、6年と隠岐経由で渡海したと記されている。

20. 李奎遠の鬱陵島外図

朝鮮国王高宗から1833年鬱陵島検察使に任命された李奎遠が現地を調査し島の周辺を描いた図。八右衛門の竹島図から50年後のものであるが共に現在の鬱陵島の海岸を良く描いている。

21. 松江藩士金森建策の竹島図

嘉永2年(1849)年2月隠岐周辺に多数の外国船が出現した。その中にはフランスの捕鯨船リャンクール号も含まれ、現在の竹島に上陸しこの島をリャンクール島とした。松江藩の藩士が隠岐警備に渡島する緊迫の中で、蘭学掛の金森建策が藩主松平斉貴(なりたけ)に自分が作った竹島図として提出したものである。詳細に検討してみたところ、13年前処刑された八右衛門の図であることがわかった。盗作というより犯罪人であるが素晴らしい絵図を残した八右衛門の業績を称え自分の名のもとに後世へ伝えたい。

22. 現在の竹島(独島)

鬱陵島で入手した図録から複写した竹島の写真。左が西島、右が東島と呼ばれる。最も高い場所は157mあるという。

23. 竹島(独島)付近の海図

韓国で作成された海図。東島の北部のくびれた部分の形状、西島周辺の島嶼に注目しておいて欲しい。東島と西島の間隔は110~170mで約300mの水道となっている。

24. 村川家所持の松島図

昨年米子市立山陰歴史館で発見した注目の松島図。1625年以降鬱陵島渡海後、松島が発見され1650年頃の文書には村川市兵衛船が松島でアシカ猟をしていることを記している。1656年頃村川、大谷家はこの島の利用を幕府に願い出て許可されているので、この時提出した松島図の可能性もある。東島のくびれた部分、西島周辺の島嶼の形状は現在の韓国の海図に酷似している。

25. 鳥取県立博物館所蔵の竹島松島絵図

鳥取藩江戸屋敷留守居役の小谷伊兵衛差出しの図とあるから、幕府から鳥取藩へ竹島松島への質問が集中した元禄8(1695)年頃のものと思われる。注目されるのは竹島松島に小屋が書き込まれていることである

26. 松島拡大図

小屋が描かれているのは東島の水道の中央に近い浜のある部分である。これから後の明治や昭和期の小屋もほぼ同じ場所に描かれ続けるので適当な場所に書いたものではないと思われる。

27. 松島がリャンクール島（岩）に変わった海図

江戸末期捕鯨船リャンクール号が到着しリャンクール島と命名したことによりフランスが自国の海図にこの名を記載すると、ヨーロッパの海図もこれを採用し、ついに明治7年から27年まで念入りに実測して、日本海軍の水路部が完成した海図も松島に変えてリャンコールの名を採用した。その為松島はつき出されるように鬱陵島の日本名となり、鬱陵島は竹島と共に一島二島名の混乱した使用が生じた。この「朝鮮全岸」と名付けられた海図は、中井養三郎が日本政府に現在の竹島の領有を請願した時、一方で朝鮮領の可能性も考えた要因であることが最近わかった。海図は島や岩等をどこの国の領有かは一切意識せず作成されるが「朝鮮全岸」の名からこの図に載る所は、朝鮮国領有の地と誤解したと思われる。

28. 明治38年直後の竹島の図

明治38（1905）年2月22日竹島は島根県に編入された。この年の内隠岐島司が竹島を実測して島根県庁に報告した図、翌年の明治39年竹島でのアシカ猟、鮑漁を中井、八幡、橋岡、池田四氏に許可した島根県が許可する海域を示した図、同年中井氏等44名と竹島へ渡り明治40年「竹島及鬱陵島」という本を出版した奥原碧雲氏が同書に掲載した数種の竹島の図、明治41年日本海軍の水路部が実測して作成した竹島図等が存在する。

29. 昭和初期の竹島図

昭和9年から13年までに9回竹島で漁をした八幡伊三郎氏が書き残された竹島図。江戸時代から変わらず住居地となっている東島の区域、アシカを煮沸して油を取ったり、鮑を湯通しして干し鮑にした釜の場所、西島に湧水の場所があったこと等が注目される。

30. 橋岡忠重氏の元での漁の具体像

昭和10年参加された吉山武氏（96歳）の回顧の写真と橋岡氏が残された収支計算書で当時の漁の具体像がわかる。